長岡工業高等専門学校研究紀要　第45巻　第２号（2009）

論　　文

工業高専学生の学習ストラテジー使用
―読解力に焦点をあてて―

占部昌蔵[1]

[1] 一般教育科―英語（Liberal Arts-English, Nagaoka National College of Technology）

A STUDY ON LEARNING STRATEGY USE OF THE STUDENTS OF NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY
－FOCUSING ON READING SKILL－

Shozo URABE[1]

Abstract

The purpose of this study was to explore learning strategy use of the students of College of Technology. Only a few attempts have so far been made at learning strategies with Japanese biginner level English learners. In this study, the students answered the questionnaire, Strategy Inventory for Language Use(SILL) by Oxford, and the frequencies of six learning strategy use were examined with 36 students who are in the third grade at Nagaoka National College of Technology. The results indicate that compensation strategies were used most frequently and that broad scope questions are more difficult to the lower level students in comparison with the upper level students. Finally, limitations and future studies are also dicussed .

Key Words : *learning strategies, reading skill, starategic competence*

１．はじめに

グローバル化した現代社会においては, コンピューターやインターネット等の情報機器だけでなく, 文化の多様性を受け入れ、国際語としての英語を使いこなす国際対話能力（global literacy）が求められていると言える．このような大きな社会の流れの中で, 学校教育においても様々な変化が生じている．初等教育から高等教育にいたるまで, 知識偏重ではなく主体的な課題解決能力を備えた生きる力の涵養と, 英語での実践的なコミュニケーション能力（communicative competence）の育成が明確な教育目標として掲げられるようになってきている．そして, この実践的なコミュニケーション能力育成において, Reading は, Input から Intake そして Output へとつなげるための, 他の３領域（listening, speaking, writing）の基礎・基本となる技能である．

２．研究の背景

２．１ コミュニケーション能力

現在でもしばしば引用されるコミュニケーション能力の理論的枠組みを作り出し，その下位能力の一つとして方略的能力（starategic competence）を定義づけたのは Canal and Swain（1980）[1)]である．その後, この枠組みは数人の研究者によって改編され，現在のところBachman（1990）[2)]の枠組みが最も完成度が高いと言われており，この枠組みの中にも，方略

的能力は含まれている．方略的能力に関して，木村（2001）[3]は，コミュニケーションを図ろうとする態度の育成において非常に必要性が高いとしている．

２．２ ストラテジー

同じ教室で同じ授業を受けても，ある学習者は100点，ある学習者は50点というように到達度や成果に差が出てくる．このような学習成果の個人差(individual differences)は教育関係者の懸案事項であったが，最近になりこれは単に学習者個人の適正ややる気だけの問題ではなく，それまでの学習経験，信条，学習ストラテジーが影響していることがわかってきた．

個々の第二言語学習者は，それぞれの方法で学習を進めていく．その学習形態は多様で，多様な学習ストラテジーを採っている．Brown（2000）[4]によると，ストラテジーとは，「特定の問題やタスクに取り組む方法，特定の目標を達成するための作業様式，ある情報の操作デザイン」と定義づけている．また，Oxford（1990）[5]では，学習ストラテジーとは，「学習をさらに容易に、迅速に楽しく自主的に効果的に，そして新たな状況にさらに応用できるようにするための学習者がとる具体的な行動」と定義づけた．Oxfordは，また，学習ストラテジーを直接ストラテジーと間接ストラテジーに分け，さらに，前者を記憶ストラテジー，認知ストラテジー，補償ストラテジーに，後者をメタ認知ストラテジー，情意ストラテジー，社会的ストラテジーに分類した．

２．３ ストラテジーと言語習熟度

優れた言語学習者の研究が進むにつれて，言語学習が苦手な学習者との違いが分かれば語学の指導に役立つのではないかという考えから，学習ストラテジー使用と言語習熟度との関係が研究されるようになった．多くの研究では，Oxford（1990）による Strategy Inventory for Language Use(以下SILL)等のアンケート調査により学習者のストラテジー使用を調べ，それと学習者の習熟度との相関関係を調べるものであった．これらの研究によると，学習ストラテジー使用頻度と言語習熟度との間には相関関係があることが明らかになった．また，学習ストラテジーと言語能力の伸びの関係について，Ellis（1994）[6]は，決定的ではないが，「優れた学習者は　学習ストラテジーの使用頻度が高い」とある程度いえると述べている．

２．４ 先行研究

これまでの読解ストラテジー研究の中で，例えばZhang, Gu & Hu（2008）[7]によると，読解力が高い学習者は，認知・補償ストラテジーや，メタ認知ストラテジーを多く使用する傾向があるとのことである．しかし，この研究は，think-aloudを利用した質的研究であるため一般化には至っていない．また，Isaji（2006）[8]によると，生徒の読みを助ける読解方略（ストラテジー）の有効性に対する教師の認識にはバラツキがあり，一貫性のない授業が行われている傾向があると報告し，また，読解ストラテジーに関する統一見解は示されていないのが現状であるとも報告している．また，Gardner, Tremblay, & Masgoret （1997）[9]では，長期間の言語学習を経ている学習者は，言語能力が十分に備わっているために多くのストラテジーを使う必要がないのではという見解もある．

３．本研究

３．１ 研究の目的

先行研究の結果をふまえ，本研究では，初級学習者である日本の工業高等専門学校生において，読解力を高めているのはどのカテゴリーのストラテジーなのかを調べること，及び，読解問題のタイプとストラテジーはどのような関係にあるのかを調べることを研究の目的とする．

３．２ 読解問題

本研究では，読解力測定のために試験問題から読解力に直接関わる問題を抽出した．さらに，Bachman & Palmer（1996)のScope of Relationship の観点から，Narrow Scope（情報量が少なく，狭い範囲の読解で解答可能）とBroad Scope（情報量が多く，広い範囲の読解で解答可能）の２種類に分類し，Narrow Scopeのタイプ（以下、Narrow型）10問とBroad Scopeのタイプ（以下、Broad型）10問の合計20問を用意した．

３．３ リサーチ・クエスチョン

本研究では，以下のリサーチ・クエスチョンを設定する．

１．読解力の高い生徒は低い生徒に比べてどのカテゴリのストラテジーを頻繁に使うのか

２．読解力の違いによって，読解問題2種類の正解率にどの程度違いが見られるのだろうか

３．４ 研究方法

実験参加者は工業高等専門学校3年生36名で，読解力を測るテストの点数によって，High-proficiency(上位)8名，Middle-proficiency(中位)20名，Low-proficiency(下位)8名，の3グループに分類した．

学習ストラテジー抽出のための質問紙として，先行研究の中で使用頻度の高かったOxford（1990）のSILLを使用した(具体的質問項目の一部を付録に載せているので参照されたい)．SILLでは，質問紙の回答者が50問の項目に1～5段階評価で答えることによって，6種類のストラテジーのうちどの種類を多用しているか又は多用していないかが診断できる．

４．結果

４．１ 結果１（ストラテジー）

SILLの質問紙調査の結果から，ストラテジー別の平均値を**図-1** に示す．（なお，棒グラフの左が上位グループで右が下位グループである．）

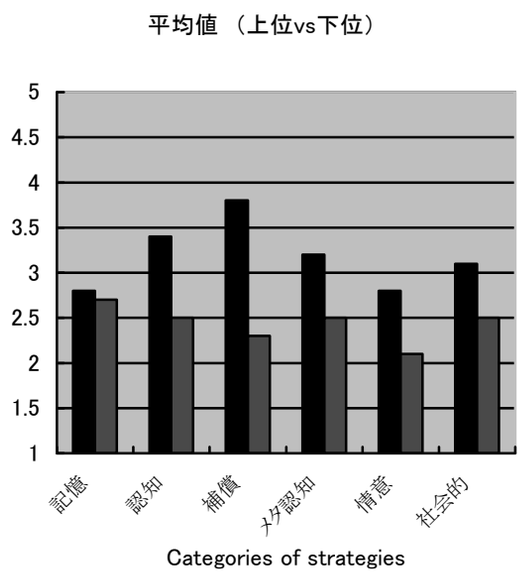

図-1　ストラテジー別平均値

補償ストラテジーにおいて，上位グループと下位グループの平均値に顕著な差が認められる．Oxfordの定めた基準では，3.5以上を頻繁に使っているストラテジーとし，2.4以下をあまり頻繁には使っていないストラテジーとしている．上位者グループの生徒は，下位者グループの生徒に比べて補償ストラテジーを最も頻繁に使っていると言える．また，上位グループの生徒は，認知ストラテジーもよく使っている．他に，下位グループの顕著な点として，情意ストラテジーを頻繁には使っていないことがあげられる．

４．２ 結果２（正解率）

読解力試験の結果から，読解力グループ別の正解率を**図-2** に示す．

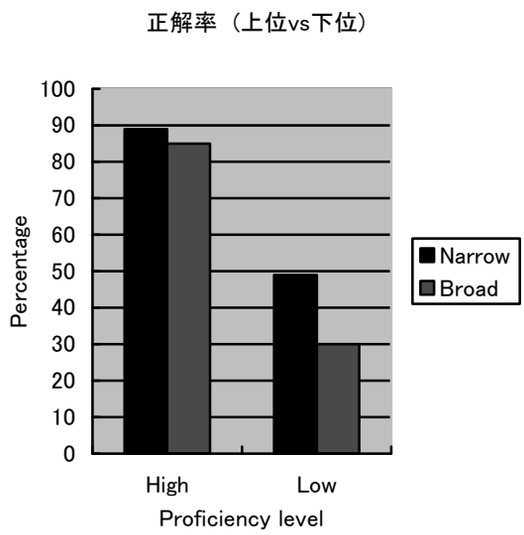

図-2　読解力グループ別正解率

上位グループは，Narrow型とBroad型の正解率が、それぞれ88%，86%とほとんど変わらない．それに対して，下位グループは、Narrow型の正解率（49%）に比べてBroad型の正解率（30%）は大幅に下回っている．

５．考察

５．１ ストラテジー別頻度

結果１から，上位グループの補償ストラテジーの使用平均値は他のストラテジーと比べて，3.8と最も高い．そこで，さらに詳しくどの設問に高く応答しているかを設問ごとに調べた結果，以下の３設問（24「知らない語を理解しようと推測する」，27「英語を読むとき，一語一語調べない」，29「英語の単語が思いつかないとき，同じ意味を持つ語や句を使う」）に高い平均値4.0で応答していることが分かった．この内の設問24，27などはまさに読解で使用するストラテジーである．設問24の行為は，Ellis(1994)でまとめられた優れた学習者の5つの特

徴のうちの1つ「推測して意味を読み取る」にあたる．また，設問27の行為は，いわゆるトップダウン・ストラテジーやCarrell(1989) [10]のいう全体的ストラテジーにあたり，一般的に優れた読み手が頻繁に駆使するストラテジーである．今回の上位グループの学習者であっても，まだ現段階では上記の優れた学習者の範疇に入っていないが，そのような学習者になっていく素は持っていると考えることができる．また，下位グループの平均値2.3と上位グループの平均値3.8とは大きな差がある．このことは，上位と下位のグループ間による大きな特徴を表しているといえる．これらのことから，補償ストラテジーの性質である「足りない語彙、文法知識を補う」機能は，高等専門学校生のような初級学習者にとって読解力を左右する大きな要因になるのではないかと考えられる．

また，今回の調査では，認知ストラテジーの頻度が2番目に頻繁に使われる結果となった．この理由は，今回の学習者はまだ初級レベルにあるからではないかと考えられる．そして，この結果は，O'Malley & Chamot(1990) [11]の報告にある「初級学習者は認知ストラテジーを多く使う」とほぼ一致する．

結果２から，上位グループに比べて下位グループのBroad型の問題正解率が大幅に落ちるのは，語彙力や文法力だけではBroad型の問題を，Narrow型の問題を解くのと同じようにはいかないからではないかと考えられる．Broad型の問題を解く際には，トップダウン的にコンテキストを読みとっていく必要があり，このストラテジーの使用がより頻繁に要求されるから正解率が大幅に落ちたのではないだろうか．よって，このストラテジーの使用頻度の高低により，Broad型の問題正解率も変わってくると説明できると考えられる．

５．２ 本研究の限界

本研究の限界として，参加者の人数が少なかったため研究結果を一般化するには限界があるという点があげられる．

６．まとめと今後の課題

６．１ まとめ

本研究では，第1に，読解力の高い生徒は低い生徒に比べてどのカテゴリのストラテジーを頻繁に使うのかを調べた．調査の結果，読解力の高い生徒は補償ストラテジーを最も頻繁に使うこと及び認知ストラテジーをその次に頻繁に使うことが明らかになった．

第2に，読解力の違いによって，読解問題2種類の正解率にどの程度違いが見られるのかを調べた．調査の結果，上位グループは，Narrow型とBroad型両方の正解率はほとんど変わらないのに対して，下位グループは，Narrow型の正解率に比べてBroad型の正解率は大幅に低いことが明らかになった．

６．２ 今後の課題

本研究は，平均値をもってどのストラテジーが頻繁に使用されているかを明らかにしたが，学習者は個々の読解問題を解くにあたって，問題のタイプに応じて使用するストラテジーを選択したり，複数のストラテジー使用して総合的に解いているかもしれない．今後の課題として，具体的にどのストラテジーが使用されるのかを調べるために，1問ごとに使用するストラテジーを特定するような質的な研究を行う必要性があげられる．また，初級学習者だけでなく中級学習者の場合も調べていく必要もある．

付録

言語学習ストラテジー調査
7.0版(ESL/EFL)

1.全然，あるいはほとんどあてはまらない
2.通常あてはまらない
3.いくらかあてはまる
4.通常あてはまる
5.常に，あるいはほとんどあてはまる
(回答はワークシートに記入する)

パートA
1.英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える．
2.覚えやすいように文の中で新語を使う．
3.単語を覚えるために，新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける．
4.単語が使われる場を心に描いて新語を覚える．
5.新語を覚えるのに例を使う．
6.新語を覚えるのにフラッシュカードを使う．
7.新語を身体で表現して覚える．
8.授業の復習をよくする．
9.新語を覚えるのにその語があった本のページ，黒板，あるいは道路標識などの位置を記憶しておく．

パート　B

10. 新語を数回書いたり言ったりする.
11. 英語のネイティブ’スピーカーのように話すよう心掛ける.
12. 英語の発音練習をする.
13. 知っている単語をいろいろな文脈で使う.
14. 積極的に英語で会話を始める.
15. 英語のテレビ番組や英語の映画を見る.
16. 英語で読むのが楽しい.
17. 英語でメモ，メッセージ，手紙，報告を書く.
18. 英語の章節をまずスキミング(ざーっと読みとる)し，再び，前に戻って注意深く読む.
19. 英語の新語に似た語を自国語の中に探す.
20. 英語の中にパターンを見つけようとする.
21. むずかしい英単語は分解して，意味を知ろうとする.
22. 逐語訳はしないよう心掛ける.
23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する.

パートC

24. 知らない語を理解しようと推測する.
25. 英語での会話中適切な語が思いつかないとき，ジェスチャーを使う.
26. 英語で適切な語が分からないとき新語を作る.
27. 英語を読むとき，一語一語調べない.
28. 地の人が次に英語で何と言うか推測しようと心掛ける.
29. 英語の単語が思いつかないとき，同じ意味を持つ語や句を使う.

参考文献

1) Canal, M. and Swain, M.:Theoritical bases of communicative apploaches to second language teaching and testing, *Applied Linguistic*., Vol.1, pp.1-47, 1980.
2) Bachman, L.F.: *Fundamental Considaration in Language Testing*., Oxford: Oxford University Press, 1990.
3) 木村松雄.：「2 英語教育の目的」伊村元道・繁住貫男・木村松雄『新しい英語科教育法』，東京：学文社, 2001.
4) Brown, D.: *Principles of Language Learning and Technology*. 4th ed,White Plains NY: Pearson Education, 2000.
5) Oxford, R.L.: *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*., Rowley, Mass: Newbury House, 1990.
6) Ellis, R.: *The Study of Second Language Acquisition*., Oxford: Oxford University Press, 1994.
7) Zhang, L.J., Gu, P.Y. & Hu, G.:A Cognitive Perspective on Sigaporean primary school pupils’ use of reading strategies in learning to read in English, *British Journal of Educational Psychology*., Vol.78, pp.245-271, 2008.
8) Isaji, T.: The determining factors in reading strategies of Japanese high school EFL learners, *ARELE*., Vol.17, pp.41-50, 2006.
9) Gardner, R. C., Tremblay, P. F., & Masgoret, A. M.: Towards a full model of second language learning: An empirical investigation. *Modern Language Journal*., Vol.81, pp. 344-362, 1997.
10) Carrell, P. F.:Metacognitive awareness and second language reading, *Modern Language Journal*., Vol.73, pp. 121-149,1989.
11) O’Malley, J.M. & Chamot, A.U.: *Learing strategies in second language acquisition*., Cambridge, England: Cambridge University Press, 1990.

(2009. 10. 5. 受付)